

海洋島

第6巻 第2号 (通巻46号)

東京都小笠原水産センター

2005年3月28日発行

〒100-2101 東京都小笠原村父島字清瀬

04998-2-2545 Fax. 04998-2-2546

白化した造礁サンゴの1年後

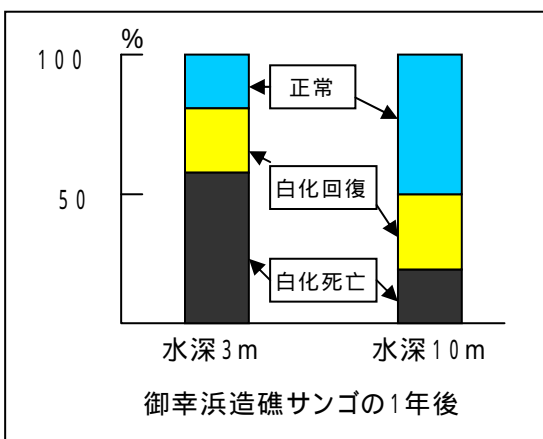
2003年9月に母島沿岸の造礁サンゴが白化したことは本誌通巻43号で紹介致しましたが、水産センターでは、当初の10月調査に引き続き、2004年1月、7月、11月に追跡調査を行い、白化したサンゴがその後どうなったかについて調べて来ました。

ここでは、母島御幸浜の水深3mと10mで行った詳細調査の結果をお知らせします。調査方法は海底の目印を基点に長さ20mのメジャーを張り、その両側25cm内を写真撮影し、着生するサンゴの変化を追跡するというものでした。水深3mではサンゴの被度は40%、当初2003年10月には白化もしくは色があせたサンゴの割合(以下白化率と呼ぶ)は全体の79%で、14ヶ月後までにそのうちの71%が死亡し、残りは回復し正常な色を取り戻していました。水深10mでは同様にサンゴ被度40%、当初の白化率47%、14ヶ月後までの死亡率43%でした。両水深を比較すると、水深の深いほうが白化・退色するサンゴの割合は低く、また、白化した

います。また、イタアナサンゴモドキ、ヘラジカハナヤサイサンゴなどは全く白化していませんでした。

2003年9月には広い面積で白化が起こりその原因は30を越える高水温にあった可能性が高いことは本誌43号でお知らせしたとおりですが、2004年1月にも一部白化継続していました。水温が低下した後4ヶ月たっても未だに白化したサンゴがあったことは驚きですが、その割合は水深3mで当初サンゴ面積の7.4%、水深10mで5.8%と低く、この後しばらくして白化は終息したものと思われます。ちなみに10ヶ月後の2004年7月には白化したサンゴはみられませんでした。

現在は回復過程に入っており、2004年11月の調査では、当初全滅したと思われるサンゴ群体の一部が生き返っていることも確認されました。水産センターでは今後も回復の状況を調査していく予定です。



サンゴの回復率が高いことが分かりました。白化率や回復率はサンゴの種類によっても異なり、

水深3mでみると、アクロポラドネイやサボテンミドリイシなどの枝サンゴは白化率が100%、回復率はそれぞれ8%、0%と大きな被害を受けていました。一方、ヒラノウサンゴ、コカメノコキクメイシ、ナガレサンゴなどは、白化率はほぼ100%ですがその内の31~100%が生き返って



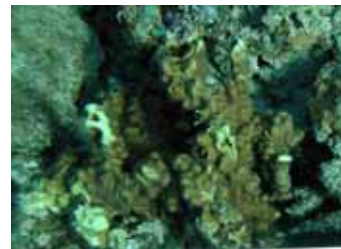
アクロポラドネイ(水深5m前後で大きな群落を作る、白化・死亡率高)



サボテンミドリイシ(大群落を作る、白化・死亡率高)



ヘラジカハナヤサイサンゴ(殆ど白化せず)



イタアナサンゴモドキ(触ると刺される、殆ど白化せず)



コカメノコキクメイシ(白化後3割復活)



ヒラノウサンゴ(左の印5cm、白化後6割復活)